Eureka XII

六年制通信 No.33 令和7年1月10日(金)号

「除日起講」、実践できましたか？

元日に花岡神社に行ってきました。君たちの健康と学業の進むことを祈りつつ、おみくじを引いたら大吉でした。以上報告いたします。

覚えていますか、昨年の終業式にした「除日起講」の話を。本当に学問をしたいのなら元日を待たずして大晦日から机に向かえばよい、そんな話でした。しかし実はこれにはちょっとしたいたずらが仕掛けてあって、私がこの話をしたのは冬休みの直前ですから、何も大晦日を待つ必要はなく、その日から机に向かえばいいわけだね。終業式に言いたかったのは「その日から机に向かえ」なのでした。このことは2年生から6年生までは知っています。1年生はひっかかりましたかな。昔から「思い立ったら吉日」と言うでしょ。「除日起講」も要するにこれと同じなのです。明日から頑張ろうと思ったのなら今からやりたまえ、本気ならできますよね。

昨年末のことですが、FM 三重のとある番組に出てきました。いろいろと教育について聞かれるままに話してきたのですが、そこで ad fontes（源泉に戻れ＝原典に当たれ）にも触れました。この冬、改めてこの大切さを実感することができました。最近、他県の知事選に関する報道姿勢をめぐって新旧のメディア対決ということが言われていますが、どちらのメディアにも誤った情報や憶測、忖度による偏向報道はあるのでしょうか。私たちは自分で何が正しいのかを見つけないといけないうえ、君たちがこれから生きる時代はつくづく大変だと思います。

私は学生時代に、憶測でものを言うことを強く戒められ、何事も文献に当たっては正確に読むことを指導されてきましたので、元の情報はどこか、根拠となる出典は何かということを考えます。新旧いずれのメディアにも孫引きが横行しています。孫引きとは、例えばAさんの発言を無批判にBさんが使い、その発言の真偽を確かめもせずCさんが用いる、そういうことです。これ、実は辞書の世界にもあります。権威ある（とされる）辞書が間違っていると、そのあとに出た辞書が同じ間違いを犯していることがあります。孫引きをしたのですね。

さて、この冬の経験ですが、君たちは歴史の時間に習うのかどうか知らないのですが、先の大戦後にマッカーサーがGHQの司令官として日本に来ますね。当時の進駐軍の統治にはいろいろと問題もあつたでしょうが、マッカーサーは日本で人気があつたのですよ。確かマッカーサー記念館を建てる計画まであつたはずですよ。ところが、彼のたった一つの発言が日本中を敵に回します。それが「日本人は12歳の少年である」という、確かに日本人を子ども扱いした発言です。以来、マッカーサー熱は急速

に冷め、むしろ日本人に嫌われることとなりました。記念館もできていませんよね。私も前々からこの発言には興味を持っていたのですが、この冬に多賀敏行さんの本、この方は松阪のご出身で元チュニジア大使ですが、『「エコノミック・アニマル」は褒め言葉だった』を読んで目からウロコだったわけです。やはり *ad fontes* が如何に大切かを思い知らされました。「日本人は 12 歳の少年」発言の出典を多賀さんは原文も添えてくれていますので、高校生は自分で訳してみてください。1951 年 5 月 5 日のアメリカ上院軍事・外交合同委員会でロング委員の質問に答えたもので、原文はこうです。Measured by the standards of modern civilization, they would be like a boy of 12 as compared with our development of 45 years. 多賀さんの訳は「近代文明の尺度で測れば、我々が 45 歳という成熟した年齢であるのに比べると日本人は言ってみれば 12 歳の少年といったところでしょう」です。興味のある人は本を読んでほしいのですが、民主主義を享受していたはずのドイツがヒトラーを産んだという危険を前提に、日本のこれからの民主化がドイツのようにならないのかと質問されたマッカーサーが、日本はまだこれからどうにでも発展できると言うのです。12 歳を選んだところにもちゃんと意図があります。12 歳、これは *twelve* でまだ子ども、13 歳から 19 歳は *teen* エイジで大人になる前段階を指します。子どもゆえどのようにも成長していけると言いたいのですね。この発言の後、日本人の素晴らしい資質を語っていますから、「日本人は 12 歳の少年」発言は日本人を侮辱するものではなかったことがわかります。原典に当たらないとわからないことはたくさんありそうですね。

シンガポール陥落の折、マレーの虎と言われた山下奉文中将が英軍のパーシバル中将に机を叩いて「イエスかノーか」と威圧的に迫ったという話は有名ですが、これもまたこの本を読めば話が違ってきます。歴史好きの生徒諸君、読んでみるといいよ。

今週のおすすめ

・青山美智子 『赤と青とエスキース』 (PHP 文芸文庫)

青山さんは好きな作家です。この人の『リカバリー・カバヒコ』も前に紹介しましたが、連作短編集がいいですね、青山さんは。この方、中京大学を出られてからシドニーの日系新聞社で記者として勤務された経験をお持ちだそうです。今回もメルボルンが最初の舞台で、留学に来ていた日本の女子学生がまだ無名の画家にエスキースを描いてもらうところから物語が始まります。エスキースは「下絵」のこと。四作の物語が赤と青だけのエスキースを中心に紡がれます。留学生と現地の男性は留学期間限定の恋人契約を交わしますが、さて二人の恋はどうなるのでしょうか。

これ、最終章からエピローグまで一気に読むと、もう一度最初からいろいろ確かめたくるところが出てきて、ああそうだったのかと、推理小説なら伏線の回収が見事に行われるといった、一種のカタルシスが味わえます。楽しい小説です。

Blue をネイティブが発音すると日本人にはブーに聞こえ、**Red** はレイに聞こえるとか、ほんとかしらね。おっと、これ、ちょっとネタバレでしたかな。

BGM は KOH⁺ の ヒトツボン でした…。